飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習の記録（第1報）
―飛騨市古川地区，富山市街地について―

香川貴志[*1]

Record of Prior Learning for an Extensive Field Trip Around Hida-Furukawa，Central Takayama and Toyama（Part 1）

Takashi KAGAWA

抄　録：本稿は，筆者が隔年で担当する学部前期集中科目「地理学特講」の事前学習会の成果をまとめたものである。現地行動の対象地域である飛騨市古川地区，高山市街地，富山市街地に関する比較的新しい論考107本を，受講生23名（全員が学部学生）と筆者（香川）が分担し精読ののち要旨をまとめた。その後，筆者が，受講生の作成した原稿を必要に応じて修正し，自身の担当分は推敲を重ねて本稿の付録部分を編み上げた。整えられた原稿は，参加者全員の共有財産となり，現地行動の際に合冊したものを配布・活用した。本稿は，そのうち飛騨市古川地区と富山市街地に関する文献要旨を整理したものであり，同様の野外実習をこれらの地域で行う際に，最も優れた参考資料の一つとして利活用できるよう周到に設計されたものである。高山市についての文献要旨は本誌所収の第2報（香川：2017a）にまとめている。

キーワード：事前学習，文献研究，書誌情報，飛騨古川，富山市

Ⅰ．はじめに ―野外実習を有意義にするために不可欠な事前学習―

本稿をまとめる契機となった「地理学特講」は，偶数年（西暦および平成）の前期に開講される科目である。主な内容は，現地でしか知り得ない様々な事象を現地で体感するということであるが，必要な時間数を全て現地でこなすと滞在日数が長くなり受講生の経済的負担が大きくなってしまう。そこで，現地行動は原則的に2泊3日の行程で組んでいる。不足する時間数は，事前学習会を3回にわたって開催し，その準備やプレゼンテーションを以って充当している。

事前学習会は，授業担当者である筆者が現地行動の説明をする時間もある。しかし，より長い時間を費やすのは，現地行動の対象地域に関わる研究論文を読み，それを発表するプレゼンテーションとそれをめぐる質疑応答である。当然ながら，要旨の仕上がり具合やプレゼンテーションの良し悪し，質疑応答における積極性などは成績評価の対象となる。

後述するように文献検索は筆者が行い，その収集・精読・要旨作成・要旨紹介を受講生が行

＊1　京都教育大学教育学部

う。本来は文献検索から受講生に担当させるのが望ましいのだが，ここから始めると厳しさゆえに受講キャンセルが出て混乱することが経験的に分かっている。そこで，ここ数年は文献検索をこちらで代行している。それでも受講生にとっては厳しく感じる者が多いのか，ここ数年はかつてのように受講生が40人を超えることは稀である。

とはいえ，事前学習における論文紹介を通じて現地での見聞が飛躍的に実りのあるものとなるのは動かしがたい事実である。受講生にとって時間的かつ精神的な負担を強いることにはなるが，それに耐えた者が地理学の本当の面白さや楽しさを実感できるよう，またそうした評判が受講生の後輩たちへ伝えられていくよう今後も努めていきたい。

Ⅱ．文献紹介の方法

今回の授業では，昨年度の「地理学研究」と同様に，現地実習を計10コマ（20時間）としたため，事前学習が5コマ（10時間）必要となった。そこで受講者が確定した時点で，第1回事前学習会を5月28日（土）に2コマ（4時間），第2回事前学習会を7月2日（土）に2コマ（4時間），第3回事前学習会を8月10日（水）に1コマ（2時間）設定した。第1回と第2回との間が1か月以上開いているのは，この間に文献収集から要旨作成までの作業を課すためである。上記のうち第1回事前学習会では，主に現地行動の行程と担当論文の確定，第2回と第3回事前学習会の進め方の説明を行った。第2回事前学習会は主に論文要旨を紹介して質疑応答に至る内容とした。論文要旨は第2回事前学習会の前日までに電子媒体で提出させた。時間的な制約により，論文要旨は各受講生が担当した論文3~4編のうちから各自が選んだ1編を紹介させた。

土曜日に事前学習会を行うと，教員採用に向けた行事，あるいは課外活動などで出席が叶わないケースが散見される。そこで出席できなかった者については，第3回事前学習会で論文要旨の紹介をさせた。また，第3回事前学習会では，各受講生がまとめた論文要旨に筆者が加筆修正を施した原稿を配布し，各自で自己の原稿と比較照合して模擬推敲で要旨の書き方を学ぶよう命じた。また，集合から解散に至る現地行動の再確認も第3回事前学習会に盛り込んだ。

事前学習会の欠席が2コマ以上に及ぶ者については，現地実習の直前にあたる8月18日（木）に，筆者が修正・編集をした論文要旨集の印刷と製本の作業に加わってもらった。この論文要旨集は，本稿の第4頁以降の付録と同じものである。現地実習第1日目に往路の車中で配布し，改めて現地情報の共有を図った（香川：2017b）。

ところで，筆者がとった文献検索の方法は，CiNiiを用いて特定のキーワードでヒットする論文を所定条件のもとで吟味してピックアップしていく方法である。飛騨市古川地区については「飛騨古川」，高山については「高山市」または「飛騨高山」，富山市街地については「富山」および「コンパクトシティ」で検索した。「古川」，「高山」，「富山」だけで検索しなかったのは，論文著者の姓，他のローカル地名，さらに「高山」では「高山（こうざん）」に関わる理科的な論文や資料がヒットすることを避けたためである。

こうして選ばれた論文は全部で98編に達した。各受講生が担当する論文の総ページ数が概ね揃うよう，また複数の対象地域に関する論文を読めるよう筆者が26のユニットを設定し，第1回事前学習会で各受講生に1ユニットずつ選ばせた。その時点では25名の受講生が居たため，筆者が1ユニットに端数となった2編を加えた6編を担当することになったが，その後に

2名がキャンセルしたため，筆者担当の論文数は13本となった。さらに筆者自身が論文要旨をまとめていく過程で，学界活動などを通じて直近の文献を知り得たため9本が追加され，筆者担当の論文は22本，受講生が担当する文献を合わせた論文総数は107本に達することになった。比較的新しい文献だけでこれだけの数に及ぶことは，今回の訪問地が注目度の高い場所であることを示唆しているといえよう。

Ⅲ．論文要旨のスタイルとその意義 ―本文のまとめに代えて―

論文要旨は，上限字数を239字とした。これは本稿付録の書式において5行以内に要旨が完結する字数である。こうすることで，論文内容をコピー＆ペーストした無駄に長いレポートを排除でき，限られた字数で要点をまとめる習慣付けなど，教育現場で求められるリテラシーのマナーや能力を向上させることができる。なお，本稿付録の論文要旨は，既述のとおり受講生から電子媒体で提出されたシートを筆者が熟読し，従来の経験（香川：2013，2015a，2015b，2016）に立脚しつつ微調整したものである。各論文の書誌情報Referenceの表記は，地理学界有数の学術専門雑誌である『人文地理』の第68巻第1号から適用されたJ-Stage対応書式に倣った。要旨を微調整する際には，論文読解力や要旨の仕上がりなどを参考にして成績評価材料を得た。

こうしてまとめられた論文要旨は，当該地域における調査の立案だけでなく，現地行動の際にも少なからず参考になる。数年後に本稿で取り上げた時期以降の同一地域での研究をまとめれば，研究視点の変化を嗅ぎ取ることもできるだろう。さらに，今回のようにキーワードとページ数の条件だけで文献を抽出した場合，狭い研究領域だけでなく周辺領域の研究成果を広く集められるため，視野の広さが重要視される地域調査では有効な事前準備を行える利点もある。

オープンアクセスが無いために論文収集に苦労した受講生も居たようだが，その経験は必ずや卒業論文を執筆する際に素晴らしい経験となって花開く。こうした経験談は従来にも受講生から聞かされたことがあるが，少しでもそれが増えてくれることを祈りつつ付録の開示に移りたい。

◉参考文献（対象地域に関する論文は次頁からの付録を参照のこと）

香川貴志（2013）「東日本大震災を受けての防災教育普及のための取組 ―さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証―」，京都教育大学紀要，123，pp. 31-45.

香川貴志（2015a）「阪神・淡路大震災20周年を機会として復興と防災・減災について考える（第1報）」，京都教育大学環境教育研究年報，23，pp. 7-15.

香川貴志（2015b）「阪神・淡路大震災20周年を機会として復興と防災・減災について考える（第2報）」，京都教育大学環境教育研究年報，23，pp. 17-25.

香川貴志（2016）「懐かしさを感じる街を歩くための事前学習の記録 ―門司港レトロ，豊後高田「昭和の町」，別府温泉郷を事例として―」，京都教育大学環境教育研究年報，24，pp. 1-14.

香川貴志（2017a）「飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習の記録（第2報）―高山市について―」，京都教育大学環境教育研究年報，

25，pp. 45-62．
香川貴志（2017b）「『まち』の再活性化を学ぶ ―飛騨古川，高山，富山における2016（平成28）年度『地理学特講』の覚え書き―」，京都教育大学教育実践研究紀要，17，pp. 1-10．

［付　録］

１．「飛騨古川」で検索した文献（1980年以降，原則的に4ページ以上，ニュース，グラビア，人文地理学との関係が薄い論文を除く，氏名50音順）。ただし，個々の論文のキーワードから「飛騨古川」は除外。

Reference：有薗正一郎（1984）．「農具揃」にみる19世紀中頃の飛騨古川盆地における耕地利用方式の地域的性格．愛知大学綜合郷土研究所紀要，29，129-142．

Key Words：農具揃，ひっか，人力すき，水田耕起具，古川盆地

Abstract：1865年に著された大坪二市の『農具揃』から，水稲耕作歴の復原や他地域との比較，さらにこの地域で最も特色のある農具「ひっか」（人力すき）を取り上げ，その形や分布，使用法，土地条件を指標にその存在の要因を考察した。その結果，古川盆地は，標高500ｍを超える高冷地であることから，これが諸現象の素地となっており，苗代期間においては，西南日本側，総作付日数では東北日本型に属することが分かった。そして，全体として，飛騨古川の19世紀頃の耕地利用方法と景観を復原することに成功した。

Reference：宇野正人（1982）．祭の構成と変化―気多若宮神社例大祭と飛騨古川祭―國學院大學日本文化研究所紀要，50，94-127．

Key Words：気多若宮神社例大祭，起し太鼓，風流化，観光目的

Abstract：気多若宮神社例大祭は別名飛騨古川祭と呼ばれる。この祭を行事構成の面から見ると，神社の行事・町組の行事・起し太鼓の行事の3つに分けることができ，これらは整合性をもって成り立っている。祭は一見不変のものと思われるが，毎年変化を重ねている。そしてその可変性こそが祭を持続させる一因であるとも考えられる。また，この祭は古川の人々だけでなく，観光客の足をも運ばせる目的をもっており，古川の人々の「祭」として，観光のためにその風流化をすすめている「祭礼」として成り立っている。

Reference：岡崎篤行（1995）．飛騨古川における住民参加による景観条例案の策定に関する研究：その1-3．日本建築学会大会学術講演梗概集（1995年），261-266．

Key Words：景観条例，景観基本方針，マスタープラン，景観形成地区

Abstract：①質の高い住民参加を行うための手法と成果，②ルールブックとしての「景観基本方針」作成過程・影響，③景観条例案中での地区指定とその基準，と大別して3章から成る論文である。古川町（現・飛騨市古川町）では以前より景観形成の取り組みが多く行われてきた。最近では大規模建設や田園地帯の急速な開発が増え，住民の積極的な協力が不可欠となった。そこで景観基本方針が示されて住民の活発な議論を，その改正時も議論が交わされる。近年では，景観形成地区の対象範囲が大きな論点の一つとなった。

Reference：岐阜県飛騨市古川振興事務所建設水道課（2005）．自治体通信 飛騨古川の街並み・まちづくり．用地ジャーナル，13（10），31-34．

Key Words：まちづくり，景観条例，環境整備，地域住民

Abstract：飛騨古川の街並みの景観は，それを守ろうとする町民気質が影響を与えてきた。しかし，外部の人間によって景観が乱されたことを契機に「飛騨古川ふるさと景観条例」が制定・施行された。それに合わせ，国土交通省の「街なみ環境整備事業」と「ウォーキングトレイル事業」の補助適用を受け，道路美装化や広場

整備等を重ねてきた。これらの取り組みには地域住民を中心とした様々な提案が盛り込まれており，住民発案の街づくりと言える。これが評価されて平成15年度「美しい町なみ大賞」の受賞に至った。

Reference:岐阜県吉城郡古川町町づくり振興課（1999）.「飛騨古川ふるさと景観条例」における取り組み.住宅金融月報，572，30-33.
Key Words：住民参加，都市景観，そうばくずし，空き家問題
Abstract：飛騨古川の街並みは歴史の深さを土壌とする高い文化と，飛騨の匠の技術による現在の街並みが復興形成されできたものである。そしてその街並み形成の根幹をなしているものが,「そうばくずし」という住民の意識であるといってもよい。そういった住民の意識から始まった景観条例は住民の高い意識のもと出来上がり，現在も町屋建造などの場で活かされている。こうした街並みの中にも空き家問題や火災の防災などさまざまな問題を抱えている。これからも住民と協調した取り組みが継続していくだろう。

Reference：栗林久美子・西村幸夫（1993）. 飛騨古川における景観ガイドライン策定に関する研究. 都市計画論文集，28，241-246.
Key Words：そうば，屋台蔵，殿町，一之町，二之町，三之町
Abstract：岐阜県吉城郡古川町（現・飛騨市古川町）での地域固有の景観や町並みの現状に立脚した地域整備の在り方についての研究を目的としている。町並み形成の歴史から入り，景観ガイドプラン策定に伴う都市開発上の課題に触れ，建築行為の具体的な分析，検証を項目ごとに行い，さらに具体策の提案に至っている。古川町の景観形成は生活環境の保全と創出によるものであり，景観ガイドプランの策定はそれを読み取る一連の作業であり，その読み取りが大切であるということを理解できる。

Reference：直井隆次（1998）. 岐阜県飛騨古川町 現在も進行しているまち並み整備. 月刊観光，381，35-39.
Key Words：天正時代，建築，そうばくずし，担い手育成，景観条例
Abstract：古川町の基礎は金森氏の城下町づくりに始まり，天領時代に今の形となった。明治に大半が焼けるが地元と，能登大工によりまち並みが復原された。古川の町屋は，雁桁造りと呼ばれる軒先が用いられ，紋様や構造材も特徴的である。その良さに地元住民が気付き，景観づくりに取り組んだ。また，そうばくずしを嫌うため景観条例がなくても調和のとれたまち並みが保たれた。ただ,他の地域からの参入など様々な影響もあり，条例が制定され，そこに暮らす人々を主役として世代を超えた価値観の共有が必要となった。

Reference：直井隆次（2008）. 継続するまちづくりを考える ―飛騨古川の経験から―. 建築とまちづくり，362，17-21.
Key Words：まちづくり，そうば，せがい造り，意匠，公道，景観条例
Abstract：江戸時代からの古川の町の成り立ちから論が展開され，また町の生活に密着した文化についても言及がみられる。行政，地域の人々の町を飾る努力によって町の建築物4件が登録文化財に指定された。しかし，近年町の人々の意識の変化により意匠にそぐわない建築物が現れてきている。特に中心市街地の周辺部が問題視されている。こうした地域においては，住民自らがまちづくりに対する義務や責任を認識することが必要で，すべての住民と自治体による緊密なチームワークの見直しが求められることを指摘している。

Reference：野村重昭（2004）．飛騨古川の町並み，まちづくり．区画整理，47（6），55-58．
Key Words：やんちゃ，そうば，景観整備，こうと
Abstract：古川のまちづくりのキーワードである，「やんちゃ」という住民が一致団結して創意と工夫を凝らすことによって，景観整備が行われた。「こうと」とは，地味で質素ながらも上品な感じや，品格を表す言葉で，このようなまちづくりが展開された。そして，「そうば」とは，ルールを守ろうという意味であり，この気質によって，市街地の三つの寺の本堂の高さを越える建物は建てないというルールのもと，景観整備が行われた結果，平成15年度都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」を受賞することができた。

Reference：古田龍雄（2003）．地域活性化の途 飛騨古川町の町並み保存．信用保証，105，96-101．
Key Words：そうば，古川やんちゃ祭り，観光，テレビ小説「さくら」
Abstract：古川町（現・飛騨市古川町）は盆地に位置し，NHKテレビ小説「さくら」で有名になった町である。町のほとんどの家屋は「町家づくり」という手法で造られており，良い雰囲気を出している。これは「そうば」という調和の意識があり，また大工が多いことにも起因している。古川祭りは「古川やんちゃ」と呼ばれる町民の自己団結の気質と合わせて語られる荒々しい行事である。また町並みそのものが観光名所となっており，そのほかの観光地は多くない。

Reference：村西真一・岡崎篤行・小柳　健（2010）．伝統的様式を継承した現代の町家におけるファサードの発展過程 ―飛騨古川の「新町家」に着目して―．日本建築学会計画系論文集，75，883-888．
Key Words：伝統的町家，新町家，ファサード，雲，肘木
Abstract：飛騨市古川町では，歴史的建造物は少ないが，長い年月をかけて自然発生的に，伝統的町家を継承した新町家によって 町並みを形成してきた。この新町家のファサードと「雲」の関係を時系列的に検証していくことで，5つのファサードのタイプと6つの肘木のタイプを確認した。ファサードと肘木は連動しており，最初は簡素だが，徐々に装飾性を増し，そして伝統的な町家の形式に帰りつつ落ち着いた形式に辿り着いたと判断できる。この発展により，新町家は一定の枠に収まりつつも，多様性も確保している。

Reference：柳　七郎（2005）．飛騨古川の地域力．地域開発，484，41-45．
Key Words：そうば意識，町並み景観，一体，まちづくり，コミュニティ
Abstract：飛騨市古川町は農業と林業を主要産業とする町である。今も農村型の共存意識である「そうば意識」がことのほか強く，祭り文化の伝承や区割り行政によるコミュニティが確立している稀有な自治体である。それと同時に，古川町には周囲と協調を崩す「そうば崩し」を嫌う地域性がある。その相場意識が町並み景観にも「秩序」を与え，現在の落ち着いた雰囲気を作り出す契機となった。古川では，このような行政と住民が一体となったまちづくりが既に何十年も前から行われている。

２．「富山」「コンパクトシティ」で検索した文献（2007年以降，原則的に5ページ以上，ニュース，グラビア，人文地理学との関係が薄い論文を除く，氏名50音順）。ただし，個々の論文のキーワードから「富山」，「コンパクトシティ」は除外。

Reference：相山晋太郎（2010）．「環境モデル都市とやま」の取組 ―コンパクトシティ戦略によるCO_2削減

計画（富山市）―．月刊自治フォーラム，604，32-39．

Key Words：CO_2削減，公共交通，環境モデル都市

Abstract：富山市では近年，市街地の外延化に伴い，公共交通が衰退する一方，自動車が市民の主な交通手段となっており，CO_2排出も大幅に増加している。市はこの問題に対し，「コンパクトなまちづくり」を中心としたCO_2削減を計画し，公共交通の活性化の推進，中心市街地や公共交通沿線への機能集積の推進，コンパクトなまちづくりと一体となったエコライフやエコ企業の推進に取り組んでいる。この大幅なCO_2削減を実現するためには，行政だけが中心になるのではなく，市民や企業などとの連携・協力が重要である。

Reference：秋元菜摘（2014）．富山市のクラスター型コンパクトシティ政策と郊外のアクセシビリティ：婦中地域におけるシミュレーション．地理学評論，87A（4），314-327．

Key Words：クラスター型コンパクトシティ政策，シミュレーション，郊外，アクセシビリティ

Abstract：地方都市郊外における日常生活のアクセシビリティに関わる問題とコンパクトシティ政策の概要について述べたうえで，政策の有効な評価手段としてシミュレーションを提案し，論を展開している。本研究では，富山市のクラスター型コンパクトシティ政策を事例とし，同政策の推進を通じて期待される郊外におけるアクセシビリティ改善への影響をシミュレーション分析し，その効果を定量的なかたちで示すことを目的としている。

Reference：井上哲郎（2006）．富山市におけるコンパクトなまちづくりに向けての取り組み．地銀協月報，554，31-37．

Key Words：公設民営，公共交通の活性化，LRT

Abstract：富山市は市街地の拡散といった課題に対応するために公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトな街づくりに取り組んでいる。具体的な活動としては，「公設民営」の考え方に基づいて，JR富山港線をLRT化し利便性の高い公共交通として復活させ沿線の活性化を図ったり，市内各所に生活拠点を設けつつ都心地区に公共投資を行い，都心部の再生を図り魅力的で活発なまちづくりを行うなど「公共交通の利便性の向上」「まちなか居住の推進」「賑わい拠点の創出」を3本柱に据えた取り組みが行われている。

Reference：井上哲郎・元橋一之（2007）．対談 中心市街地活性化への挑戦―コンパクトシティを志向する富山市の取組みと課題―．ターンアラウンドマネージャー，3（6），47-51．

Key Words：中心市街地活性化，大合併，串と団子，LRT，都市マスタープラン

Abstract：本論文は対談内容をまとめたものである。富山市は「富山らしさ」を第一に，「公共の交通の利便性の向上」，「賑わい拠点の創出」，「まちなか居住の推進」の3本柱で中心市街地活性化を進めている。これまで，将来において高齢者の増加とともに自動車を利用できない層が増えていくという懸念があった。そのため，富山市の特徴の1つである鉄軌道を活かした公共交通の活性化によって，自動車が無くても生活できる徒歩圏を充実させるコンパクトなまちづくりが中心市街地活性化を図るための政策として導入された。

Reference：今井一貴・佐藤徹治（2015）．水害リスクを考慮した土地利用施策評価のための将来時系列の人口分布推計モデルの開発：富山県富山市を対象として．都市計画論文集，50（3），656-662．

Key Words：人口分布，水害リスク，応用都市経済モデル

Abstract：将来の人口減少を踏まえた市街地再編の方向性として，インフラ維持管理の効率化や環境負担軽減などのコンパクトシティの重要性と，水害などの自然災害リスクの低減化の視点が重要である。富山県富山市を対象として，水害リスクが将来の人口分布に及ぼす影響について試算を行った結果，水害リスクの高い地域での人口減少率が顕著になり，水害リスクは将来の人口分布に影響を及ぼすことが判明した。この結果は，河川行政と都市行政が連携した今後の望ましい都市のあり方の検討への活用が期待される。

Reference：牛場　智（2012）．「LRT」導入による「コンパクトシティ」政策と地域商業のアート的マーケティング：富山市を事例に．創造都市研究（大阪市立大学大学院創造都市研究科紀要），8（1），7-29．

Key Words：商業集積，集客セクター，LRT，インサイト，アート的マーケティング

Abstract：富山市を事例としてLRT導入と利用者のインサイトの側面を検証しそこからコンパクトシティ推進への具体的な政策の研究を行っている。また既存研究やヨーロッパでのLRTの活用などと比較し，インサイトを活用した商業集積の新しいマーケティングの必要性を説いている。結論として，LRTと商業・観光などの集客セクターとの相互作用・両面政策の構築が重要であると述べている。LRTを軸としたコンパクトシティ政策が有効であり，集客策から来訪者，入店客，購買客の獲得へと転換する手法が不可欠である。

Reference：笠原　勤（2007）．コンパクトシティ実現に向けた富山市の取り組み．都市計画，56（2），60-65．

Key Words：公共交通活性化，高齢者，おでかけ定期券，公共交通沿線居住推進地区

Abstract：富山市では，車を自由に使えない市民が人口の約3割を占めており，そのうち60歳以上が約7割を占めている。つまり，車を自由に使えない市民，とりわけ高齢者にとって，決して「生活しやすい都市ではないといえる。そこで富山市は，旧富山港線を富山ライトレールとして改装開業し，さらにこれと路面電車との接続を企図するなどした。また高齢者におでかけ定期券などの制度を創設したりして，公共交通の活性化を図った。これらの実施で公共交通沿線居住推進地区に住む市民の割合を増やそうとしている。

Reference：門野圭司（2011）．公連協調査研究報告 コンパクトシティとバス交通―青森市と富山市の取り組みから―．公営企業，42（12），46-54

Key Words：バス交通，青森市，公共交通，コミュニティバス

Abstract：富山市は都市交通政策の徹底的な転換と密な連携を保ちつつ公共交通利用の活性化に取り組み，公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトシティの形成をまちづくりの基本理念に掲げている。都心部を中心とした同心円状の都市構造ではなく複数の都市圏を利便性の高い公共交通ネットワークによって結ぶクラスター型の都市構造を目指す。交通空白地には市の責任でコミュニティバスが運行され，市民の自主性に期待し住民自身の能動的な取り組みを引きだす試みがなされている。

Reference：金丸弘美（2013）．ライトレールが走るまち―富山市のコンパクトシティー構想―．地方行政，10401，10-14．

Key Words：ライトレール，フライブルク，エコタウン，まちづくり

Abstract：現在，富山市ではライトレールによって郊外と市街地が結ばれており，各地域の産業や商業が連携できる素地が整っている。これは，ドイツの環境都市の先進地であるフライブルクでも既に実施されているまちづくりである。また，市内では自転車の共同利用制度の整備や，富山港に近い郊外にはエコタウンが作られ

るなど環境維持にも多くの配慮がなされている。また，住居と商業施設が複合した建物など，公的機関による従来のまちづくり概念を覆す未来の生活空間が新たに創造されている。

Reference：唐渡広志（2013）．富山市の公共交通政策とコンパクトシティ．日本不動産学会誌，26（4），77-82．

Key Words：公共交通，土地利用，高齢化，まちなか

Abstract：富山市では自家用車の保有が多く，それが住民の郊外への移転を促して中心部では高齢化が加速している。この現状を変えるため，市はコンパクトシティ政策をとり，交通や活性化の拠点づくりに尽力している。この計画の中間報告としては劇的ではないものの進歩が見られた。ただ郊外化の抑制には法制度の見直しなども必要だろう。さらに交通整備を政策の中で謳っているが，それが都市のコンパクト化につながるのか。地価の高い中心部に人を呼ぶには駐車場の問題もある。政策としては改善の余地があろう。

Reference：京田憲明（2015）．コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築．サービソロジー，2（1），26-33．

Key Words：人口減少，公共交通，LRT，中心都市活性化，まちづくり

Abstract：人口減少に悩まされる富山市は，未来の市民の健康的な生活のために，横断的なプロジェクトを立ち上げ，ひとがつながる「本当のまち」づくりを目指して，コンパクトシティの創造を模索している。その3本の柱として，①公共交通活性化（LRTなど），②公共交通沿線地区への移住推進，③中心市街地活性化（グランドプラザなど）を掲げ，それぞれにおいて一定の成果を収めている。今後はLRT駅周辺エリアの事業がしやすい仕組みを整えていく必要がある。

Reference：京田憲明・本村陽一・山下倫央（2015）．富山市におけるコンパクトなまちづくりの背景．サービソロジー，2（1），34-39．

Key Words：中心市街地活性化，まちづくり，組織づくり，乗数効果

Abstract：近年，富山市が推進している公共交通を軸にしたコンパクトなまちづくりが注目を集めている。当初は，環状道路や放射道路を整備するまちづくりを目指していたものの，小渕総理（当時）の発表を機にモデル都市に選ばれ，コンパクトな街づくりへの方針転換が図られた。コンパクトシティを支えるものは富山市による組織づくりである。従来は各部署で担当が分かれていた壁を無くし，横の連携を強化するようにしたことでまちづくりは成功に向けて動き出した。

Reference：酒巻貞夫（2007）．街づくりマーケティング．浜松大学研究論集，20（2），183-215．

Key Words：少子高齢化，社会基盤，中心商店街，若者文化

Abstract：少子高齢化，人口減社会，自治体の財政難等に対応し，行政・商業機能や住民を街の中心に集めるコンパクトシティづくりが，この富山をはじめ，各地の地方都市で加速している。生活のための社会基盤の整備を中心市街地に集中し，中心商店街の活性化や公共投資の効率化を図ることがその狙いである。若者文化が盛んとなったり，交通網を整備したり，中心市街地への奨励策を行政府と地域が連携していくことが大切になっている。

Reference：坂本　壮・森本章倫・大門　創（2015）．欧州諸国におけるLRT導入が人口変動に与える影響に関する一考察．都市計画論文集，50（3），774-779．
Key Words：人口減少，人口変動，拠点集中型まちづくり，公共交通，LRT，欧州都市
Abstract：人口減少家庭にある日本では，地方都市を中心として，公共交通を軸とした都市機能集約型のコンパクトシティ化促進に向けたまちづくりが進められている。とくに富山市におけるLRTを活用した拠点集中型まちづくりは注目の的になっている。その今後を占うためにLRT先進地域である欧州27都市を事例として，比較検討の材料とするためにLRT導入前後の人口変動を分析した。加えて，うち4都市については一層詳細な分析を施し，LRTの導入が人口変動に及ぼした影響について考究した。

Reference：産業立地編集部（2007）．富山県富山市―“串とお団子”のコンパクトシティ―．産業立地，46（4），45-50．
Key Words：串とお団子，まちづくり，公共交通，まちなか
Abstract：富山市は全県庁所在地の中でも人口密度が最も低く，高齢者率も30年後には35％を超えると予測されている。しかし現状は，自動車への依存度が高く，公共交通を十分に活用できていない。富山市が目標とするのは，自動車への依存度が低いコンパクトシティであり，例えに出すのが「串とお団子」のイメージである。ここでの串は市民が使う活性化された公共交通，お団子は串で結ばれた市民の徒歩生活圏を指す。富山市の施策は，中心市街地活性化に向けた，公共交通活性化と徒歩生活圏の人口増加に要約できる。

Reference：土井　勉（2007）．潮目の転換期を迎えたまちづくりと公共交通―富山市におけるコンパクトシティへの取り組み―．運輸と経済，67（2），15-23．
Key Words：公共交通，まちの再生，モータリゼーション，市街地拡大，路面電車
Abstract：富山市は2000年国勢調査でDID人口密度が都道府県庁所在都市の中で最低で密度の低い市街地が広がり，モータリゼーションが極度に進んだ都市である。こうした状況のもと，交通弱者にとって暮らし難い都市になることを懸念した市は，路面電車を活用したコンパクトシティへの脱皮を本格化させた。富山ライトレールや富山地鉄市内線は近い将来に相互直通運転が計画されており，市が標榜する「お団子と串」のまちづくりが進むことになる。上記の市内線も環状線として機能強化の予定（2009年に開通）である。

Reference：富山市都市整備部中心市街地活性化推進課（2013）．コンパクトシティの実現に向けた中心市街地活性化．地域開発，580，25-29．
Key Words：公共交通，おでかけパス，中心市街地活性化，国家戦略プロジェクト，環境未来都市
Abstract：富山市は日本海側有数の中核都市であり，今も発展を続けている。平坦な地形や高い道路整備率により，薄く広がった市街地を変革するために，「公共交通を主軸にした拠点集中型のコンパクトなまちづくり」を推進している。市内電車環状線化事業，おでかけパス事業などで中心市街地活性化を図っており，それらは市内電車の乗車人数や歩行者通行量の増加を促した。このような積極的な取り組みもあって，富山市は平成23年に国家戦略プロジェクトの一つである「環境未来都市」構想の対象都市に選定された。

Reference：中出文平（2013）．富山市のめざす串と団子型のコンパクトシティ：マスタープランが描く空間ビジョンと実現に向けた計画・施策．土地総合研究，21（2），9-18．

Key Words：都市計画マスタープラン，お団子と串，地域生活圏，LRT，中心市街地活性化
Abstract：自家用車普及率が高く平野部に市街地が広く展開した富山市は，一層の高齢社会を迎える将来に大きな不安を持ち，都市計画マスタープランにおいて「お団子と串」というキャッチフレーズを打ち出した。これは徒歩で生活が完結する地域生活圏を「団子」，複数の生活圏を相互につなぐ公共交通を「串」に見立てた都市計画で，串の役割を果たすのがLRT（富山ライトレール，富山地方鉄道市内線）ということになる。同時に上位の団子として中心市街地活性化を図るというコンパクトシティ政策は全国的に注目されている。

Reference：中村圭勇（2014）．コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築（富山市環境未来都市計画）：ソーシャルキャピタルあふれる持続可能な付加価値創造型都市を目指して．建築機械施工（一般社団法人日本建設機械施工協会誌），66（3），19-24．
Key Words：次世代環境都市，環境未来都市，まちなか回帰，低炭素社会，スマートグリッド
Abstract：市内における人口密度が県庁所在都市の中で最低だった富山市は，今後進展していく人口減少・超高齢化に対応するために，「コンパクトシティ戦略」を打ち出した。そして，次世代型路面電車システム「LRT」の導入，「公共交通沿線居住推進地区」の設定，「中心市街地への集中投資」という三本の柱を掲げた。また，「課題先進国」といわれる日本で，国家プロジェクトである「環境未来都市」に選定され，「環境・超高齢化対応等に向けた，人間中心の新たな価値を創造する都市」を実現する取り組みを進めている。

Reference：日経アーキテクチュア編集部（2013）．検証 インフラ整備を絡め都市再編：軌道に乗り始めた富山市のコンパクトシティ．日経アーキテクチュア，992，44-49．
Key Words：車依存社会，交通弱者，公共インフラ，再開発，「串とお団子」構想
Abstract：富山市は三つの課題を抱えていた。一つは，車依存社会の富山市で，高齢化の進行に伴って車を運転できない「交通弱者」が増加したこと。二つ目は，人口分散の進行が公共インフラの維持管理コストの増大を招いたこと。三つ目は，中心市街地の衰退が富山市の財政基盤を脆弱にさせることだった。これらを解決するために「コンパクトシティ戦略」が打ち出され，中心市街地では再開発ラッシュが起こり，そこへの転入が転出を上回るようになった。また，「串とお団子」構想によって公共交通の利便性向上が図られた。

Reference：日経グローカル編集部（2007）．先行の富山・青森両市は「羅針盤」にならず？ ―5月にも「第2陣」認定 目先の補助金狙いの自治体も―．日経グローカル，73，6-10．
Key Words：改正中心市街地活性化法，体系的，認定，補助金
Abstract：全国の約30の自治体が富山・青森両市に続く，改正中心市街地活性化法に基づく国の認定を目指し基本計画案を作成している。しかし，コンパクトシティの推進を掲げながらも実態は再開発などの補助金獲得を目指した事業の羅列が珍しくない。体系的でメリハリの利いた取り組みをしている自治体もあれば，各事業が独立した印象を受け体系的とは言い難い都市もまだ多い。また，認定のハードルをどの高さに据えるかなど，国のさじ加減次第ではコンパクトシティの実現が理念倒れになってしまう恐れもある。

Reference：日経コンストラクション編集部（2010）．まちづくり コンパクトな都市へ基盤整備加速 ―わずか3年でLRTの環状線化を実現した富山市―．日経コンストラクション，495，58-63．
Key Words：LRT，路面電車，「くし」と「だんご」，徒歩

Abstract：富山市中心部の路面電車（LRT）に着目して，富山市のコンパクトシティ化の過程と現状を分析している。路面電車の環状線化は「くし」として一定以上の公共交通サービスを提供し，沿線徒歩圏である「だんご」に居住，商業，業務などの機能を誘致する効果を狙っている。路面電車の整備に伴って歩道や集客施設のハード面の整備も行われたが，実際に集客効果のあるイベントなどのソフト面の強化が必要とみられる。また，路面電車の積極的な利用を促し，いかに中心部に住民を集めるかが今後の課題となるだろう。

Reference：廣瀬康夫・松原和仁・薮内朋子ほか（2015）．座談会 コンパクトシティという解き方をめぐって．建築とまちづくり，446，6-12．

Key Words：平成の大合併，コンパクトシティ，LRT，路面電車

Abstract：富山市では，2005年の大合併により，その対応策としてコンパクトシティ構想が始まったとされる。結果として，その構想は中心市街地だけでとどまっている。またクルマ社会の富山県では，公共交通への切り替えも難しいのが実情である。しかし，路面電車を維持したことや交通網の整備に関しては，この政策の中で絶対的に評価できることである。今後コンパクトシティ政策の定着を図るためには，歩行者中心のヒューマンライフを大切にし，市の中心部に若者の定住人口を増やす努力を怠らないことが大切である。

Reference：堀　友彰（2014）．コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築．新都市，68（9），42-46．

Key Words：持続可能的発展，公共交通，高齢化，都市再生特別措置法

Abstract：富山県富山市は都市再生特別措置法等の改正をきっかけとして公共交通を活用した拠点集中型のコンパクトな街づくりを目指している。コンパクトなまちづくりの実現に向けて，①公共交通の活性化，②公共交通沿線への居住推進，③中心市街地の活性化を施策の３本柱として立てている。高齢化社会に対応した持続可能な都市経営・まちづくりをOECDと協力して意見交換の場を設ける計画を行うなど，富山市にみられる世代や国家を超えた取り組みが理解できるシンプルで明快な論文である。

Reference：まちづくり編集部（2008）．富山市―公共交通を活用した「串と団子」のまちづくり―．まちづくり，18，32-39．

Key Words：公共交通，都市政策，串と団子，再開発

Abstract：富山市のコンパクトシティは公共交通を活用した都市政策であるが，当時の富山市にとって，それは駅の高架化，合併で拡大した市域への対応，中心地の賑わいの復活という三要件を満たす必要があった。これらを同時に解決したのが「串と団子のまちづくり」である。「串」が公共交通，「団子」が徒歩圏である。この徒歩圏に中心市街地的な都市機能を充実させる。コンパクトな中心は1つではなく，公共交通の充実により多数の沿線駅周辺地区の開発を進めることで，高齢化社会を視野に入れたまちづくりとなった。

Reference：三橋浩志（2014）．コンパクトシティ政策と産業政策の関係に関する考察：富山市を事例として．地域政策研究（高崎経済大学），16（2），83-102．

Key Words：工場団地，産業政策，公共交通，中小ベンチャー企業，土地利用

Abstract：富山市を事例に，コンパクトシティ（CC）政策を進めるうえで工業などの産業区画をどのように位置づけるべきなのかを考察している。工業都市である富山市には工場団地は不可欠であるが，CC政策の中では商業や住宅地の中央集中と工場団地の関係は明示されていなかった。しかし，公共交通の充実によって，現

段階で都心と工場団地間における人の交流が認められる。また，中小ベンチャー企業への支援政策も立案されており，今後は公共交通や企業支援を通して工業とCC政策を関連させることが必要である。

Reference：森　雅志（2014）．講演 公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり：コンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築．運輸と経済，74（4），169-180．

Key Words：都市経営，公共交通，LRT，高齢者

Abstract：従来と同様のまちづくりを続けると地域間で温度差が生じる。つまり暮らしやすく魅力的な場所とそうでない場所の差が開く。現状を変えるために，富山市では「公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり」，「質の高い市民生活づくり」，「地域特性を生かした産業振興」の三本柱を掲げた。その主な取り組みとしてLRTの導入と市内電車環状線化などを例示し，中心市街地活性化の意義や効果をまとめている。このような新しい政策を実施し，徐々に成功体験を積み重ねてきた富山市の姿が鮮やかに描き出された。

Reference：柳内久俊（2010）．研究員リポート コンパクトシティの都市像と創造―金沢市，富山市の挑戦―．日経研月報，386，72-77．

Key Words：都市，高齢化，利便性，公共交通，LRT

Abstract：高齢化により，郊外生活の魅力が減り，大都市でも利便性を求めて私鉄沿線の地区の住宅需要が増えている。金沢市では市街地への車の流入を減少させることが基本戦略となっている。また公共交通はバスに依存するだけになっている。それに対し富山市では，LRT線へリニューアルするなど公共交通指向型の都市計画が実践されている。公共交通指向型の都市再生は，高齢化や環境対策などに有効なものであるが，都市圏の土地利用の適正化が求められると同時に，郊外開発の抑制への取り組みも望まれる。

Reference：吉川賢一（2012）．現地報告 富山市の公共交通活性化によるコンパクトシティへの取組：まちづくりの軸となる公共交通活性化施策と効果．地方議会人―未来へはばたく地方議会，43（5），32-39．

Key Words：人口減少，高齢化，公共交通，中心市街地活性化，移住

Abstract：富山市は，人口減少と高齢化や中心市街地の空洞化，公共交通の衰退などの課題を抱えた都市である。これらの課題に対応するため，コンパクトシティを目指したまちづくりが実施された。その柱を公共交通に定め，利便性向上のための「富山ライトレール」の開業，中心地活性化と回遊性向上を狙った市内環状線化，鉄道の活性化などの施策を進めた。それに伴い，沿線地域への移住，新たな住所購入などの推進などを支援した。結果として沿線利用者向上などの良い結果が得られており，一定の活性化が認められる。

Reference：吉田　肇（2014）．地方都市におけるコンパクトシティの導入に関する考察~宇都宮都市圏と富山都市圏におけるケーススタディ~．宇都宮共和大学都市経済研究年報，14，97-108．

Key Words：少子高齢化，交通弱者，自家用車保有率，CO_2排出量，自動車分担率

Abstract：宇都宮市と富山市の都市圏は，少子高齢化が進む社会情勢のもと，市街地が都市域を超える勢いで拡大して自動車保有率が高く，日常上交通手段における自動車分担率も高いのが実情である。こうした社会では，高齢者や若者などの自動車を保有しない層にとって移動上の制約が著しく大きくなる。本研究では，コンパクトシティの創成に向けていち早く動き出した富山都市圏の経験を踏まえて宇都宮都市圏への応用が模索されており，中心市街地だけに留まらない都市圏スケールでのトータルな視点の必要性が協調された。